

リライトカードを応用した透析情報カードの導入

寺邑朋子、橋村春和[※]、泉谷春義[※]、守澤隆仁[※]
青柳武志[※]、三浦園子[※]、高橋俊博[※]、伊藤利子[※]
高橋きよえ[※]、佐々木 忍[※]、鈴木寿文[※]
医療法人あけぼの会 花園病院 内科、同 透析室[※]

Application to Dialysis Patient Information Cards of the Rewrite Card

Tomoko Teramura, Harukazu Hashimura, Haruyoshi Izumiya, Takahito Morisawa
Takeshi Aoyagi, Sonoko Miura, Toshihiro Takahashi, Toshiko Itoh
Kiyoe Takahashi, Shinobu Sasaki, Hisanori Suzuki
Hanazono Hospital

<緒言>

災害時には施設が透析不能となり、患者が他の施設で透析を受けなければならない事態が起こり得る。その際には混乱した状況の中で、必要な情報を支援施設に確実に届けなければならない。当院では災害用患者情報伝達手段として、リライトカードを応用した透析情報カードを導入したので報告する。

<リライトカード (図1) >

リライトカードは、消去する温度と印字する温度を変えることで何度も書き換えが可能なカードであり、各種ポイントカードや病院の診察券などによく使われている。素材はPET（ポリエチレンテレフタート）で寸法は縦85.5mm×横54.0mm、片面窓枠内がリライト部で裏面は磁気データ部となっている。印字領域は全角で20文字×13行で500回以上の書き換えが可能である。

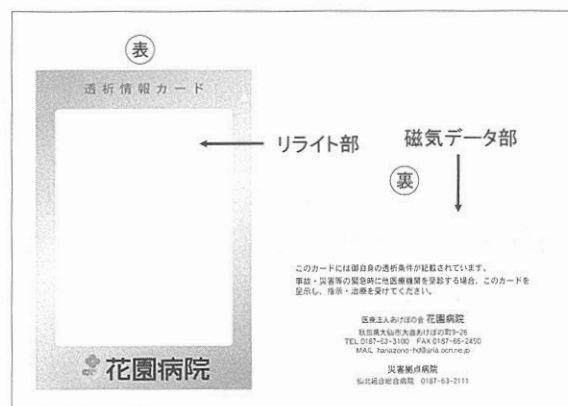


図1. リライトカード

＜透析情報カードシステム（図2）＞

透析情報カードシステムのソフトウェア開発はニプロ社に依頼した。患者情報の入力パソコンで行い、パソコンに接続したリライトカードリーダーライターにカードを挿入し、情報の読み取り・書き換えを行う。パソコンの患者情報入力画面（図3）を表示するには、カードをリライトカードリーダーライターに差込んで磁気データを読み取って画面を開く方法と、パソコンのファイルを直接開く方法がある。情報入力は直接入力またはリストからの選択で行う。図4に印字した透析情報カードを示す。裏面には当院の連絡先と地域の災害拠点病院の連絡先を印刷してある。

当院では透析情報カードを来院時の受付カードとして利用し、カード挿入時に情報が自動更新されるようにした。患者が来院時にカードをリーダーライターに挿入すると、パソコン画面に受付時刻と氏名が表示され、カードは最新の情報に書き換えられて排出される（図5）。

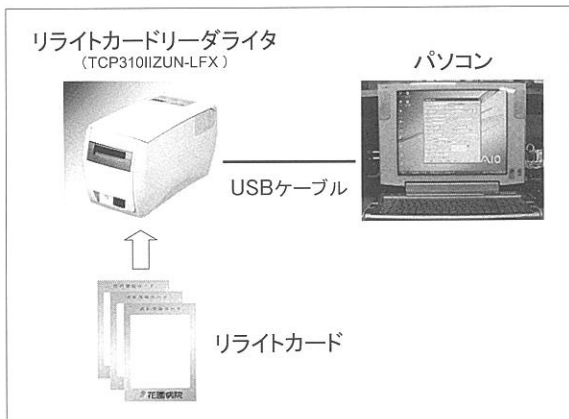


図2. 透析情報カードシステム

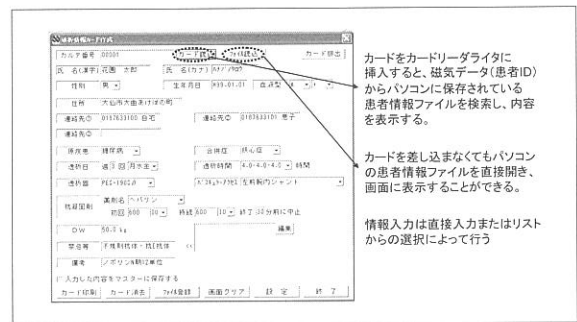


図3. 患者情報入力画面

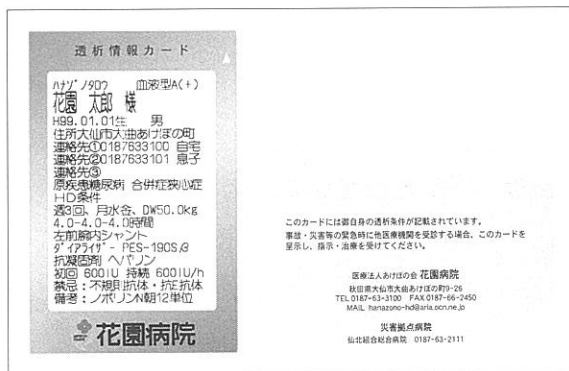


図4. 透析情報カード

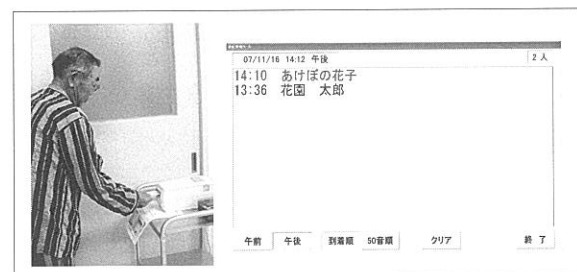


図5. 受付カードとしての利用

＜透析情報カード導入後の状況＞

透析情報カード導入後、カードを忘れる患者は殆どおらず、携帯率はほぼ100%である。受付カードとしての毎回の利用が携帯率を高めたと思われる。また、スタッフの作業はパソコン入力のみで、カードの書き換えは患者が受付する際に自動で行われるため、手間が少なく便利である。

＜考察＞

平成16年10月の新潟県中越地震では3施設が透析不能となり、延べ336名の患者が最大6日間

他施設で透析を受けた。このときは、主に同行スタッフによりカルテや透析経過記録が持参された。その他にはFAXや電話による連絡が行われた¹⁻³⁾。平成17年3月の福岡西方沖地震、平成19年7月の新潟県中越沖地震ではいずれも1施設が透析不能となり、福岡では126名、新潟では145名の患者が2日間他施設での透析を余儀なくされた。この2つの災害ではいずれもFAXで被災施設から支援施設に患者情報が送られた^{4,5)} (表1)。

表1. 過去の災害における患者情報伝達

	新潟県 中越地震 平成16年10月23日	福岡県 西方沖地震 平成17年3月20日	新潟県 中越沖地震 平成19年7月16日
透析不能施設 患者数 期間	3施設 336名 最大6日間	1施設 126名 2日間	1施設 145名 2日間
患者情報 伝達手段	カルテ・透析 記録、FAX	FAX	FAX

平成7年の阪神淡路大震災のような都市型災害と異なり、被災人口の少ない地方都市で起こる地域密着型災害では、患者が施設毎にまとまって動くことが多いため、患者自身が携帯するカードや手帳の必要性は都市型災害ほど大きくない⁶⁾。しかし、災害時には通信手段が長時間にわたり障害される可能性や、自施設の患者と連絡が取れなくなる可能性もあり、FAXや電話での連絡に支障をきたすことも考えられる。また、緊急時の透析に必要な情報は限られており、思いカルテを運ぶ必要性も高くない。このため、万一の備えに最低限の情報を記したカードや手帳の携帯は意義があると考えられる。なお、施設においても透析情報カードを予備に持つことや、迅速にFAXできるような最新の患者情報を準備しておくことが重要と思われる。

ところで、災害用のカードや手帳を作成している施設は多いにもかかわらず、過去の災害では患者カードや手帳はほとんど役に立たなかった。この理由は、結局、普段使わないものは、いざ災害時には持っていないことが多く、また、持っていたとしても情報が古いものでは意味がないためである⁶⁾。せっかく作ったカードや手帳を無駄にしないためには、常に携帯していること、および最新の情報であることが必要である。

リライトカードはキャッシュカードやクレジットカードと同じサイズであり、財布に入るので携帯しやすい。また、当院で行っている受付カードとしての日常的な使用は携帯率をさらに上げる効果があり、受付時の自動更新機能により常に最新の情報が書き込まれるため、災害用カードとして有用と思われる。

<結語>

リライトカードを応用した透析情報カードは携帯しやすさと情報更新の容易さから、災害時用患者カードとして有用と思われる。

参 考 文 献

- 1) 鈴木正司：災害に学ぶー過去から(3)2004年新潟県中越地震①教訓と対策、およびエコノミークラス症候群への配慮、臨床透析、22：1491-1497、2006
- 2) 青柳竜治：災害に学ぶー過去から(3)2004年新潟県中越地震②透析医療の支援について、臨床透析、22：1499-1504、2006
- 3) JKW2005第48回日本腎臓学会学術総会、第50回日本透析医学会学術集会・総会、日本透析医会、新潟透析懇話会、新潟県臨床工学技士会：「新潟県中越地震と透析」中越透析懇話会・新潟透析懇話会報告集
- 4) 片渕律子：福岡西方沖地震で被災してー現場よりー、日本透析医会雑誌、20：434-442、2005
- 5) 成田一衛、大森健太郎、下条文武：新潟県中越沖地震ー新潟県中越地震後の新潟県災害時透析医療体制の検証ー、臨床透析、23：1853-1854、2007
- 6) 赤塚東司雄、山川智之：災害時の対応ー現在(2)検証された対策と今後の問題点、臨床透析、22：1517-1524、2006